

岩崎岩次先生のご逝去を悼む



日本火山学会名誉会員岩崎岩次先生は、2005年11月13日、東京都区内の病院で逝去されました。享年96歳でありました。

先生は1909年(明治42年)新潟県西蒲原郡赤塚村(現新潟市赤塚)でお生まれになり、20歳まで郷里で旧制中学、高等学校に在学した後、東京帝国大学に入学され、1933年同大学理学部化学科を卒業、同大学院に進み、1938年に大学院卒業後は、帝国学士院の補助により、火山の地球化学的研究に従事されました。地球化学的研究の入門は、先生の恩師であります木村健二郎先生と共に岐阜県苗木地方に調査に行かれた時からだと、晩年先生はおっしゃっていました。その研究は、1932年に「苗木地方の鉱泉のラドン含量(地鉱誌)」として発表され、これが先生の最初の論文と思われる。その後本邦各地の火山岩の主成分・微量成分を分析されましたが、現在のような機器分析装置はほとんど無い時代、大変な御苦労をされた事を後年伺いました。また先生は実試料の分析を行いながら、岩石の化学分析法も工夫改良され、我が国でのケイ酸塩分析の草分けとなりました。

1939年4月、九州帝国大学に新設された理学部に着任され、多くの学生を御指導されながら数十報の研究論文を発表しました。この間の主な研究は、岩石・鉱物に加えて別府、湯布院、阿蘇周辺の間歇泉あるいは本邦西部地域の温泉水の主成分、放射性成分等を対象としています。

1950年4月からは東京工業大学に移られ益々研究の幅を広げ、火山活動による事象・現象の究明に種々の創意で多くの研究成果を上げられました。中でも東京に戻られてまもなく、先生が学生時代から研究対象にされていた伊豆大島三原山の噴火が起こり、この溶岩流中からガスを採取されたのが、その後の火山研究の出発点になったと伺いました。質量分析装置を逸早く火山ガスの

分析に用いられ、また岩石を加熱し、放出される微量ガスを分析されるなど創意に富んだ研究をされています。火山ガスの研究を集大成されたマグマ発散物の分化現象の論文は先生のご創意によるもので、その後の火山ガス研究の基礎とされています。一方、1950～51年溶岩流試料を系統的に採取して、化学成分の分布を検討し、地球化学におけるサンプリングの重要性を示されました。また、先生の研究室では地球化学試料を対象とした、多くの分析法を確立され、例えば、その一つである塩化物イオンの定量操作は世界的に広く用いられ、各種の公的分析法にも採用されました。更に先生は早くから天然水(河川水、湖沼、地下水)の研究も手掛けられ、現在の環境汚染が問題になる50年前から水質について提言をされました。水を対象に研究をされていた事からだと思いますが、先生は趣味の一つに、噴水を見学し写真に収めることを喜びとしておりました。晩年、随筆として国内はもとより世界各地の噴水、水場を紹介しています。

1970年4月から東邦大学理学部化学科の専任教授になられました。先生は東邦大学理学部の創成期から非常勤講師として授業ならびに卒業研究の指導を担当され、卒業研究では百数十名の学生が先生に直接御指導をしていただきました。同大学に移られ大勢の学生に囲まれ、大学運営の委員を受けながらも、火山研究は一時も休む事なく化学的な視野から火山活動に関連する現象の研究を続けられ、火山活動とそれに伴う火山性酸性泉との相関に関する研究をはじめ多くの研究業績をあげられました。

先生は日本火山学会草創の時期からの会員として、学会の諸役員、分科会の委員(長)そして1972年～1974年までの2年間は日本火山学会会長として、会の発展に貢献して頂きました。日本火山学会の発展は、先生をはじめ諸先輩の御活躍が礎となっており、今日の隆盛を迎える事が出来ました。先生は、学会設立当初からの学会の発展、火山研究の発展に多大な貢献をされ1983年に火山学会名誉会員に推挙されました。

先生が情熱を傾けて育ててこられた私達後輩は、先生の教えを守り、火山現象に対する鋭い視野を継承しつつ、火山活動の推移の究明や防災に取り組んで参るつもりであります。ここに慎んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。合掌

(記 吉池 雄蔵)